

講演「韓国民話の世界」(要旨、日韓文化交流基金 NEWS71 号に掲載)

2014年6月26日

金基英氏(韓国民話の語り部)

### 時を超えて語り継がれる民話

古くから人々の生活の中で親しまれてきた民話。世界中にはさまざまな民話が存在しますが、韓国にも昔話やおとぎ話など、人々が語り継いできた数々の民話があります。学校教育が始まるずっと昔から、子どもたちは、両親や祖父母など大人たちから聞かされた民話によって、家族や友だちとの関わり方、年上の人への接し方など、社会生活を学んでいきました。まだ文字の読めない小さな子どもたちは、毎日毎日繰り返して聞かされるこうしたお話が楽しみで、夕ご飯が終わると、「ねえ、おばあちゃん、今日はどんなお話をしてくれるの?」とおばあちゃんのまわりに寄ってきます。するとおばあちゃんは「むかしむかし、虎が煙草を吸っていたころのお話だよ……(昔話を始めるときの決まり文句)」と、お話を始めるのです。

こうした民話は、はじめは家族のだんらんのなかで年長者が語って聞かせていましたが、そのうち、家の中から外へと広まっていくようになりました。広場や人の集まる場所で、聴衆を前に語られるようになると、民話は子どもから大人まで、人々の娯楽として成長していきました。時代に合わせて、聞き手に合わせて、少しずつ変化しながら、民話は語り継がれました。決まりや、やってはいけない事を、そのまま子どもたちに言って聞かせても、なかなかわかってもらえませんが、物語のなかに溶け込んでいると、自然と記憶に残っていきます。こうして子どもたちは社会の規則を学び、それをまた自分の子どもたちへと伝えていったのです。大人たちも例外ではありません。嫁姑が仲良く暮らす知恵なども、民話のなかにちゃんと語り継がれています。年齢や性別に関係なく、人として、賢く、慈悲深く、幸せに暮らす術が、民話のなかにはぎっしりと詰まっているのです。

### 日本で民話の面白さを知る

金基英さんは1989年来日。以来、日韓の架け橋となるべく、地域の言語指導ボランティア、外国人相談窓口、親善大使などを務めるかたわら、民話の語り部としても活躍してきました。1999年に千葉県船橋市で開かれた民話フェスティバル「外国人の語りの部屋」で、金さんははじめて民話を語る機会をいただきました。それ以来、金さんは各地で韓国の民話を語りながら、合わせて、韓国の文化や伝統を紹介することに、使命感を持って取り組んでこられたのです。

日本では民話を語るイベントが各地で催されています。金さんは来日してはじめてこのような民話のイベント、ネットワークに接したといいます。韓国にも“口演童話家”と呼ばれる方々がいて、各地でさまざまなお話を語っていますが、金さんのような韓国の民話の語り部は少ないようです。金さんは日本で韓国民話の語り部として活動するかたわら、韓国の民話のなかにある精神を通して、日韓の人々がみんな仲良くすることを望んでいるので

す。

金さんはイベントなどで民話を語る時、当日、会場に集まったお客さんの顔を見て、何を語ろうか、次々に演目が浮かぶといいます。集まった人たちが語ってほしいお話を教えてくれるのだといいます。

### 日韓の架け橋として

民話を語るようになってから、金さんはさらにたくさんのお話を語りたいと思い、韓国の書店を訪れたそうです。でも、10 数年前の書店には民話の本がほとんどありませんでした。民話の語り部として活躍されている金さんですが、意外なことに、金さん自身が実際に耳で聞いて覚えた民話は3つしかありませんでした。そのうちのひとつが今回基金で語られた、青蛙のお話です。不思議なことに、民話を語り始めてから、子どもの頃に本で読んだお話が次々に頭に浮かび、どんどんレパトリーが増えていきました。

韓国の民話は儒教思想をベースにしていますので、親孝行とか恩返し、年上の人を敬う、という教えを含んだものがほとんどです。日本で「民話と文学の会」と出会い、そこでさまざまな日本の民話を知った金さんは、同じような話が韓国にもあるかもしれないと思い、調査をはじめます。するとやはり韓国にも同じような話がたくさんみつかりました。やはり、日韓の長い文化交流の歴史が、民話の世界にも色濃く影響しているということでしょう。もちろん、似ているようで、ちょっとちがうものもあります。それもまた、日韓の文化のちがいを反映していると思うと、さらに比較してみる楽しさがあります。たとえば、韓国の民話の特徴のひとつにはハッピーエンドがあります。悲しみをたくさん持っている国だから、と金さんは語ります。悲しい体験が多いから、お話はハッピーエンドにしたいという、人々の願いが反映されているのでは、というのです。

### 民話を通して真の国際交流を

今回の講演会で金さんが語られた民話は、青蛙の話、親孝行な虎の話、そして舅に栗を食べさせる話の3話。青蛙の話は、親の言うことを聞かない蛙が、お母さん蛙のお墓を川辺に作ってしまったために、雨が降るとお墓が流されるのが心配で泣いてばかりいるというお話。親の言うことを聞いて、親を大事にきなさいという、親孝行の教訓を含んだお話です。次に、親孝行な虎の話は、暗い山道で虎に出会ってしまった男が、助かりたい一心で、お前はもともと人間の子供で、自分の兄だと嘘をつくというお話です。自分が人間の子供だと思い込んだ虎は、山で採れた食べ物をその家に運んで、精一杯親孝行しますが、母親が死んだ時、悲しんで自分も死んでしまったというお話です。男は自分の嘘のせいで虎を死なせてしまったことを悔やみ、その子どもたちをずっと見守ったのです。このお話には、親孝行の他、嘘をつくことへの戒めや、命の大切さなど、さまざまな教訓を含んでいます。そして最後の舅に栗を食べさせる話は、厄介者の舅に栗を食べさせればすぐに死んでしまう、と聞かされた嫁が毎日朝、昼、晩と舅に大きな栗を食べさせるというお話で

す。早く死んでほしいと願って食べさせた栗ですが、むしろ舅は元気になり、嫁に感謝します。嫁ははじめて舅の愛を感じ取り、それからは仲良く助け合って暮らした、というお話。

最後の舅に栗を食べさせるお話は、金さんの大のお気に入りのお話です。日本でも東北地方に『毒まんじゅう』というよく似たお話があります。気に入らない姑に寺でもらった毒まんじゅうを食べさせたら、姑がとても喜んだというお話です。実は普通のおまんじゅうだったのですが、姑がうちの嫁はよくできた良い嫁だと話しているのを聞いて、この嫁はそれまでの自分を改めて、姑と仲睦まじく暮らしたというお話です。心のなかで思っている、なかなか相手に伝わりませんが、毎日栗を食べた舅が嫁に感謝したように、また『毒まんじゅう』の姑が嫁を褒めていたように、伝えようとする心が大事では、と金さんは語ります。韓国語に「말로 천량빚을 갚는다」ということばがあります。「ことばで千両の借金を返す」という意味です。人は誰でも褒められたり、感謝されたりすると、とてもいい気持ちになって、もっとがんばろう、尽くしてあげようという気持ちになるものです。

民話のなかにはこのように、人の心を温かくしたり、元気にしたり、やる気にさせたり、とさまざまな感動が詰まっています。金さんはこれからも民話をとおして、人々が本当に分かり合える、感動し合える交流を育んでいきたいと考えているのです。

(了)